黙示録の記録

第 14 章

永遠の福音

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目　次

第 10 章　甘くて苦い相続

第 11 章　創造主の二人の証人

第 12 章　長い期間にわたる闘争

第 13 章　邪悪な三位一体

第 14 章　永遠の福音

第14章　永遠の福音

黙示録１３章に書かれている世界に対する獣の恐ろしい権力と邪悪な目的とは完全に異なり、１４章は小羊の偉大な力と聖なる目的が確かであることを私たちに示しています。あたかもヨハネが詩篇作者のことばを反響しているかのようです。「私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた。・・・正しい者の救いは、主から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。主は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。」（詩篇３７：３５－４０）と。

十四万四千人の救い

大いなる裁きのラッパが吹き鳴らされる前に、素晴らしい出来事がヨハネによって記録されていました。

イスラエルのあらゆる部族の中から選ばれた十四万四千人の額には保護の印が押されていて、地に住む人々に解き放たれようとしている災害によって彼らは何の傷も受けないと確かに示しているのです（黙示録7：2－4、9：4）。しかし今、邪悪な者は額に獣の刻印を受けていない人はすべて死ななければならないと命令を下しました（黙示録13：16，17）。こうして闘争がはじまりましたが、「創造主［神］から生まれた方が彼を守っていてくださるので、邪悪な者は彼に触れることができないのです」（Ⅰヨハネ5：18）。

黙示録14章1節　また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。

ヨハネは十回この決まり文句を用いています。「また、私は見た」そして「見よ」（黙示録4：1、5：6、6：5，8、7：9、14：1，14、15：5、19：11）。各々の場合、この決まり文句は、驚くべき出来事への導入で、ヨハネがなかなか信じられない、また、いままで目撃した事のない出来事の先触れです。

ヨハネに突然現れた幻でこれ以上驚くべき光景はありません。獣とその軍勢の最も厳しい迫害をもってしても、印を押された十四万四千人の1人さえ殺せないのです。そして、ヨハネは、彼らすべてが、患難期の終りにシオンの山に栄光の内に集まっているのを見るのです。父の名そのものによる保証の印が、今やその良い業を行わせているのです。最早異邦人が聖なる都を汚す事はありません。なぜなら、父が選ばれた人々は、地上にある父なる創り主の栄光の御国で一つの新しい国民となるのです。

小羊は、彼らと共に聖なるシオンの山で、彼らの真ん中にいます。そして、最終的に御自身の御国を要求

するだけでなく、所有するのです。獣や彼の預言者によって命じられた専制的支配と致命的粛清にもかかわらず、ヨハネはやがて来る確かな事としてこれらすべてを見ています。

多くの註解者はこの文章を霊的に解説して、それを天における栄化された聖徒たちの幻と取っています。ある理由で、未来派の解説者は、しばしば、黙示録7章の十四万四千人のしもべを黙示録14章の十四万四千人とは異なるグループを現わすと考え、「シオンの山」は、勝利した教会、または天にある家、あるいはそのようなものと見做します。しかし、シオンは聖書で常にエルサレムが立っている実際の山か擬人化されたエルサレムそのものを指して言及されているのです。そしてこれが事実です。

現代の人々は、しばしば天に言及して解釈されているヘブル12章22～24節に当て嵌めさえするのです。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神［創造主］の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神［創造主］、全うされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいているのです。」

「近づいている」は、ヘブル書10章22節のことば、又は第一テモテ6章3節の「同意」という言葉を基本的に意味しています。上述のヘブル人への手紙の文章をひと押しすると、書簡が当てられたユダヤ人のクリスチャンは、罪の裁きについて語っているシナイ山から発せられる教義だけでは満足していないで、イエスの血を通しての救いの教義へと、そして万物回復、更新の究極的約束へと続いていたのです。生ける創造主の都、天にあるエルサレムは、主が空中に帰って来られるその日実際に天から下って来ます。この新しいエルサレムの地上のモデルは、その時しばしば旧約聖書の預言（イザヤ2：3）で繰り返されていた約束であるシ

オンの山、エルサレムにある文字通りの山に建てられるでしょう。義人の霊は死で完全にはされず、復活とキリストの裁きの座で完全にされるのです。さらに、長子たちの教会の大集会は、キリストが帰って来られる時に一緒にそう呼ばれるのです。

こうして、ヘブル12章22～24節と黙示録14章1～5節は、患難期の終りにキリストが地上に帰る時に、エルサレムにあるシオンの山にすべての聖徒が将来集合することに関する言及です。聖徒の多くは、甦りと栄化の後（Ⅰテサロニケ3：13、黙示録19：14）キリストと共に帰りますが、患難期を生き残っている聖徒たちもまたそこにいるでしょう。そしてこれらの人々の長は十四万四千人の人々です。

黙示録14章2節　私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。

ヨハネが実際に小羊を最後に見た時、小羊は大患難を逃れた大勢の人々に取り巻かれて天の御座の真ん中にいた。その事は、彼らはこれら同じ十四万四千人の証人の証を通してキリストを受け入れ救いに与っていたことを暗に示唆しているのです。ヨハネは十四万四千人に印が押された直後、預言的幻で彼らを見ていました。そして患難期の終りに移された。そして明らかに地上での働きのために天にある御座からキリストとすべての聖徒たちが降って来る直前のことを指し示しているのです。

ここで同じようにして、ヨハネは、時に先立って、選ばれたキリストの証人達と共にいる小羊を見るために瞬く間に移されたのです。証人達は大患難を肉体のまま生き延びて、エルサレムにあるシオンの山で勝鬨

を挙げて立っているのです。

しかし、その時、将来の栄光を一瞥して、ヨハネはすぐ、空中にある御座の真中からの力強い叫び声で、患難期の中ほどに引き戻されます。この時点で、小羊は長老たちや生き物と共に、なお其処にいます。十四万四千人はなお地上で証しを続けており、大群衆はなお大患難から抜け出してきています。

もう一度天からの力強い声が雷の音（黙示録6：1）と大水のとどろき（黙示録1：15）のように鳴り響きます。然し、この時の声はケルブまたは御座についておられる方の声でさえなく、大群衆の声であった。彼らは荘厳な聖なる歌を繰り返し歌っています。ハープの美しい旋律が大勢の歌を伴ってまた天にある群衆を通してあふれ出ていました。

黙示録14章3節　彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌った。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった。

歌は、天に於いても地に於いても今まで聞いた事のない新しい歌であった。歌の主旋律は明らかではありませんが、キリストの証のために献身した十四万四千人の経験にとって最も相応しい旋律です。彼らは小羊の血によって買い戻され、額に刻印された父の名によって護られており、奉仕と証に彼ら自身を完全に捧げたのです。多くの者が何世紀にもわたって、キリストの忠実な証人であり殉教者でしたが、このようなグループは、それまで決してありませんでした。彼らが歌っている歌は、誰ひとりかつて実際に学んだ事はありません（ギリシャ語の意味は「経験的に理解すること」を意味しています）。天の集会は、ことばと音律で歌えますが、十四万四千人

の人だけがその意味を本当に理解出来るのです。何故ならそれは彼らの新しい歌だからです。

聖書は九つの「新しい歌」について告げており、その歌の歌手を特に対象とした栄光の主旋律を語っています。最初の六つは詩篇（詩篇33：3、40：3、96：1、98：1、144：9、149：1）にあり、一つはイザヤ書42章10節にあります。新しい歌の一つは、小羊が地球の権利証を受け取った時（黙示録5、9）に、小羊の御座で贖われた群衆が歌いました。最後の新しい歌は、この場面にあります。もう一つほかの歌が黙示録で言及されていますが、それは「新しい歌」ではなく、もっと正確に言えば「モーセの歌と小羊の歌」（黙示録15：3）であり、そのことははっきり認められます。

十四万四千人の歌のことばは記録されていませんが、それは確かに彼らが「地上から贖なわれた」という大いなる真理にあります。ある意味で、すべての救われた人々は地から贖われているが、これらの人々は他の人々よりもより深い方法でこのような主旋律の意味を知る事が出来るのです。彼らは携挙の後に救われました。その頃、人類史上最大の迫害と創造主の最大の裁きが地上にありました。彼らは、ノアのように（創世記6：8）、この時「主の目の前に恵みを得た」のであり、「地に住むすべての人」とは分けられていました（黙示録13：8）。彼らは」霊的に救われているだけでなく、言わば前もって、地上に来る呪いそのものから救われていました（創世記3：17）。そして、保護の刻印によって苦痛と死から護られていました。さらに、彼らは、小羊が彼らに定めた独特で彼らに要求している使命を果たすため、彼らの生涯で罪そのものから明らかに自由にさせられているのです。

黙示録14章4節　彼らは女によって汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、

小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神［創造主］および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。

十四万四千人を確認するしるしは全く特殊なものですが、註解者たちは彼らを霊的にとらえる傾向があり、十四万四千人を自分のかってな思いあがりで、その思いを満足させるグループに当てはめようとしています。例えば、もの見の塔・エホバの聖者のような宗教集団は、自分たちこそ十四万四千人であると主張しています。また他の広く受け入れられている見解は、すべての世代で創造主に選ばれた傑出した僕たちをさすというものです（確かに、十四万四千人の中にはこの考えを推し進める人々も含まれていることでしょう。

しかし、聖書は明瞭です。第一に、彼らは皆ユダヤ人の各部族から選び出された1万2千人の男子です。彼らは人々から贖いだされた「創造主のしもべたち」で、彼らはすべての事で、彼らの主の命令に従います。不従順な点は何もありません。さらに彼らは皆童貞で、誰も性的経験をもたない人です。

これら十四万四千人は、もっと正確にいえば明確に記された厳格なグループです。どんなに捜しても、歴史上にも現在の世界にもこのような特徴ある集団の人々を捜し当てることはできません。結論から言うと、彼らはまだ招かれてもいないし、刻印を押されてもいないのです。患難期の独特な緊急事態が十四万四千人の証人の独特な使命を要求し、そして、これらの人々は創造主によって特に用意されるに違いありません。

ある学者たちは「女によって汚された」のことばにしり込みし、「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。」（ヘブル13：4）とのことばに目を止めます。それゆえ、彼らは、語られている童貞とは霊的童貞をさすと仮定しているのです。ちょうどパウロがコリント人に語った時、パウロは彼

らを「清純な処女として」キリストに（Ⅱコリント11：2）ささげることを願ったように、偶像崇拝やまたは他の霊的不誠実さで天におられる花婿に対し穢されることのないようにと願ったのです。

パウロ自身結婚しないでおり、かつ、このような状態をコリントの人々に勧めていたことを記憶に留めおかなくてはなりません（Ⅰコリント7：1，7）。ただし、彼らがそのように召されその賜物を与えられていたならばのことです。主イエスは幾人かの人に向かって「母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」」（マタイ19：12）と言いました。

患難期を通しての証人のこの特別な使命の重荷は、実に必要で差し迫っているので、その使命を行う者は、個人的娯楽も家族の必要にも関わっていられないのが事実です。彼らは妻子と共に過ごす時がありません。彼らは小羊が導くところにはどこにでも小羊に従って行かなければなりません。「独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。」（Ⅰコリント7：32）。彼らは結婚しないでいなければならないだけでなく、彼らはまた同時に若い時の性的m罪からも完全に自由でなければなりません。結婚で寝床を汚さないとしても、生活のどの分野でも創造主のみこころを踏み外していることは汚すことです。これら選ばれた人々の場合、彼らの童貞と完全にただひたむきに主に従うただ一つの目標を持つことは彼らの若い時からの彼らに対する創造主のみこころでした。

彼らは「創造主と小羊にささげられる初穂」と呼ばれています。このように言われているのは、明らかに患難期の初穂、恐らく、復興イスラエルの最初の実に対する言及に違いありません。患難期以前に救われた人々に関していえば、キリストご自身が「まず初穂」であり、それに続いてキリスト、次にキリストの再臨のと

きキリストに属している者です。」（Ⅰコリント15：23）とある通りです。けれども、イスラエル人が完全に救われる遥か前に、「こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。」（ロマ11：26）時に、患難期の終りの信者たち、これら十四万四千人のイスラエル人は、初穂として救いだされ、大患難期の最も厳しい年月における、彼らの兄弟たちや他の人々に対する特別な奉仕のために、準備されたのです。

黙示録14章5節　彼らの口には偽りがなかった。彼らは傷のない者である。

これら献身した創造主のしもべたちの誠実さに対する更なるあかしが此処にあります。彼らの主人「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」（Ⅰペテロ2：22）とあるように、これらの証人達はキリストに忠実であるばかりではなく、キリストが死んだ人々の魂の必要にも非常に忠実で、彼らの口はキリストのメッセージを完全にそのまま伝えます。

彼らの唇には何のいつわりもないので、彼らの手には何の欠点もありません。「もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。」（ヤコブ3：2）。誰一人彼らの歌を学び得ないのは驚くには当たりません。

では、十四万四千人の人々（すなわち、贖われた人々）が、なぜの前にそんなに完全であり得るのでしょうか。答えはただ創造主の恵みによってのみあり得るのです。例えば、ノアは「正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった」が、このような証が彼に与えられる前に「ノアは主の前に恵みを得た」（創世記6：8）

のです。「まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ」（ルカ1：15）ていたバプテスマのヨハネのように、また、使徒パウロが、創造主は「母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになった」（ガラテヤ1：15）と証したように、これらの人々は胎内で召され準備されていたのです。彼らは罪のない者ではなかった。何故なら、すべての人は罪を犯したのだから。即ち、ノア、パウロ、バプテスマのヨハネでさえ。しかし、創造主は、彼らが決して性的汚れの罪に陥らないように彼らを準備し、幼児から主に熱心であるように保護してきました。人々の中からの彼らの罪の贖いは世界の基が置かれる前から定められていたが、教会時代のクリスチャンたちの携挙の後まで実施されなかった。

その時、熱心なユダヤ人である彼らの目が遂に開かれた、そして、彼らが長く求めていたメシヤとして主イエスを認め受け入れた。彼らの罪は既に許されていたので、彼らは今や「主の御前に落ち度のないもの」でした。そして、なお主の恵みによって、彼らが学んでいたことどもを続けることが出来ました。使徒ユダは創造主が「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方」（ユダ24）であると実際に約束して記しています。

このように、創造主に全く捧げきった偉人たちの日々は過去のものではありません。有史以来の聖徒たちすべてが、来たるべき大集合で、ノア、ヨブやダニエル（エゼキエル14：14）の様な以前の創造主を敬った族長たちとシオンの山で会うばかりでなく、最後の世代の力強く創造主を敬う若い証人達にも同じように会うという、途方もない経験となるのです。彼らの過去から未来に至る聖なる人々の例は、今の世代の人々に、私たち自身の証で罪を悟らせ、挑戦しわたしたちに勇気を与えることが出来るのです。恐らく、創造主の恵みの内に、私たちが今している事が、将来十四万四千人の選ばれた人々の使命と救出に何らかの形で役立つ事

があり得るのかもしれません。

創造の福音

もう一度、ヨハネの注意は地上に向けられます。十四万四千人の証人に関する天における証は与えられており、彼ら自身の証は獣の束縛下と創造主の裁きの下で動揺していた世界に対し創造主の証を精いっぱいしていました。しかしながら、二人の主だった証人（十一章で検討したように恐らくエノクとエリヤ）は去ってしまった。そして死の恐怖が獣を拒否しキリストに従うすべての人に重くのしかかっています。たとい十四万四千人の証人が創造主の保護のもとにあったとしても彼らが行くどこででも確かに妨害を受けたのです。そして、多くの人々は彼らのメッセージに注意したり彼らと友となる事をひどく恐れていました

黙示録14章6節　また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。

さらに6人の天使がこの場面に現れます。すべての天使は地上のすべての住人たちのために伝えるまたは関わる差し迫ったメッセージをもっています。次から次へと重要な証を宣言します。僅かでも創造主に対する恐れをもつかまたは救いに関心を持つ人なら誰にとっても大いに興味のある証です。

第一の天使は驚くべき使命を行います。キリストは大宣教命令を与えていました。そして、「福音を述べ伝

えなさい」（マルコ16：15）と彼らに命じています。使徒パウロは大声で「もし、私が福音を述べ伝えなかったら、私はわざわいだ」（Ⅰコリント9：16）と叫んでいます。そして、彼の最後の警告は「み言葉を宣べ伝えなさい」（Ⅱテモテ4：2）という差し迫った命令に強調点が置かれていました。イエス・キリストの素晴らしい福音の宣教は、常に、信者であるクリスチャンの無比の特権であり責任でした。依然として、歴史のこの時点で、全く新しい福音宣教の方法を必要とするほど明らかに厳しい状態になっています。たとえ、十四万四千人がなお地上にいて証をし続けているとしても、彼らは最早テレビジョンやラジオ放送に出ることはできません。そして、人々が自ら彼らの話を聞くため出掛けて行くためにさえ死の恐れが伴うのです。地上に住む人々の一万人またはそれ以上の人一人一人に福音を述べ伝えるためには、このようなただ一つのあかしの方法しかないのです。したがって、残された短い時間内に個人的使命で彼らすべての人に福音をとどける事は人間的に不可能なはずです。さらに、十四万四千人のイスラエル人の多くの努力は、必然的に彼ら自身の兄弟たちに福音を伝え弟子とすることに向けられ、患難期の終りにキリストが来られる時、彼らの救い主を受け入れる準備を彼らにするのです。

他方、前に指摘したように、地上にいる人々は、最早創造主を無視することはできません。彼らは、クリスチャンたちが携挙されたとき残した聖書やクリスチャンの文献に近づく手段を持っていただけでなく、彼らはエノクやエリヤの3年半に及ぶ証を聞いていたし、地上に下される多くの大いなる聖なる裁きを経験していたし、空を駆け巡る創造主につく天使達を見その宣言を聞いていました。そして、少なくとも、実際に天と地で起こっている事をある程度悟っていました。それでも、彼らはなお創造主と創造主としてのキリストを拒否し続けます。そして、獣の刻印を受けるという差し迫った危険にさらされ、悔い改めと救いのあらゆる希

望を失うのです。

創造主は、こうして、限りない恵みをもって力ある天使を送り込まれます。そして、中天を前へ後ろへ飛び交いながら、各々の国ことばですべての国民と部族に隈なく大声で次から次へと福音を宣言するので、来るべき裁きについて誰一人聞かなかったと言い得る人はいなくなります。

また、注意すべきは、天使が述べている福音は「永遠の福音」です。福音に関して言えば、それには新しい事も今までと異なることも何一つありません。事実、パウロは、もし天からの御使であろうとパウロが述べ伝えた福音に反することをあなたがたに伝えるなら、その天使は創造主に呪われるべきで（ガラテヤ1：8）その言葉を受け入れるべきではないと警告していたのです。これに加えて、真の福音とは何かを良く知っていたヨハネ自身が、天使のメッセージを永遠の福音と読んでいた事実を考え合わせると、この福音こそ真実でただ一つの福音である事を決定的に証明しているのです。

実に不思議な事に、今もなお多くの聖書教師たちが異なる教派ごとに、幾つかの異なる福音（「恵みの福音」「王国の福音」「永遠の福音」など）、を主張しています。けれども、善意からであっても、恐らくこの種の解釈学では、恐らく特別な神学体系に固執することになるので、聖書の教え自体に矛盾します。それは、結果的に、ご自身の考えを述べる能力のある創造主を否定することになるのです。このような理由で、創造主が言われたことを一般信徒の利益のために創造主が意味している通りに訳し直す適切な神学教育を受けた聖書を解釈する人を必要としているのです。

それは私たちが述べ伝え、あらゆる時代の信徒が述べ伝えるように命じられ、天使が述べ伝えている福音です。福音は永遠です。それは創造主からの良い音づれで、その幅は非常に広いのです。多くの記述は、福

音の本質について多くの洞察を与えていても、その意味を徹底的に論じ尽くしてはいません。それは栄光の福音（Ⅱコリント4：4）、平和の福音（エペソ6：15）、御国の福音（マルコ1：14）、創造主の福音（Ⅰペテロ4：17）、キリストの福音（ロマ15：19）創造主の恵みの福音（使徒20：24）、救いの福音（エペソ1：13）であり、そして多くの他の面を持つ福音です。然し、ただ一つの真の福音があり、その福音は永遠に続きます。

事実、ここでの「永遠の福音」という言葉は、聖書で用いられている福音に関する最後の言葉であり、この最後の言葉は、聖霊がヨハネを通して「永遠に続く」と云っておられることから一層大切なことばになります。その福音はいままでに存在していないし、他のどのような福音にもなり得ない福音なのです。

黙示録14章7節　彼は大声で言った。「創造主・神を恐れ、創造主［神］をあがめよ。創造主［神］のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

福音はしばしば主イエス・キリストの身代わりの死、埋葬と身体の甦りであると定義されています。第一コリント15章1－4節に基づいており、そこではこのことばはその中心的出来事（全部で101回）に用いられます。これは確かに中心になる福音の焦点ですが、決してその意味の全体的範囲を言い尽しているわけではありません。それは永遠から永遠に至るキリストとの完全な働きを包括しているのです。

福音と言う言葉がマタイ4章23節で初めて用いられていることは大切です。それは「御国の福音」に対する言及であり、キリストが王の王としてあまねく歓呼の声で迎えられる大いなる日を楽しみに待っている福音なのです。最後に福音と言う言葉が出て来るのは、ここ黙示録14章6節で、創造を振り返ってみています。キリストの福音（キリストに関する良い音づれ）は、キリストが万物の創造主（したがって、すべての被造物を管理し裁く事が出来る）であり、万物の救世主（それゆえ、キリストによって創造主に来るすべての人々を完全に救う事が出来る）で、すべてのものの相続者（それゆえ、今天にある創造主の御国を確かに地に齎す事が出来る）であると言う事です。創造は福音の土台です。再臨は福音の祝された希望です。十字架とからの墓は、福音の力となります。創造も完成もない福音は、十字架も空の墓もない福音と同様に骨抜きにされた福音です。もし彼らが真の尊厳とこれらすべてに満たされた状態で教えるのでなければ、本当に福音を述べ伝えることはできません。

天使が話す度に、その下にある地上の広範囲に聞こえるように、途方もなく大きい声で叫びます。天使のメッセージは永遠の福音で、その状況は差し迫っており、「そのとき主は、神［創造主］を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々」（Ⅱテサロニケ1：8）にこようとしている裁きを強調しているのです。地上に住む多くの人は繰り返し、創造主の愛を鼻であしらってきましたが、裁きの恐怖に応答するかもしれない人がなお幾人か残っているのです。「火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、」（ユダ23）、それゆえ、中天を飛ぶ天使は、「創造主を恐れよ！」「裁きの時は近づいた」との警告のことばの叫び声で始めているのです。

勿論、人を裁く創造主の権利は創造の事実に基づいています。「創造主に栄光を帰せよ」「すべてのものを創造された方を伏し拝め」と天使は叫んでいます。

天使の福音宣教で創造を強調している事を誰も奇異で不適切と思わないように、世界の住人が何世代にもわたって創造主を認めない進化思想で教育されていることを彼らは明確に理解しなければなりません。サタ

ンとその手下たちは、創造主を礼拝するのを拒否するために知的で合理的教育として進化論を採用して来ました。そして、失われた人々も堕落した天使達も共に創造主を創造者として拒否してきました。彼らは、宇宙はそれ自体永遠の実体であると自分自身をだまし、「創造主の代わりに造られた者」（ロマ1：25）を拝み仕えているのです。この途方もないウソで自分自身をだまし続け、彼らはこの偽りを彼らの聴衆すべてに教え続けています。聖書が述べているように、サタンは「全世界」を欺いている（黙示録12：9）のです。そして、もしキリストが創造主でないなら、キリストは救い主にも来るべき王にもなり得ません。終わりの時代のこれらの人々は、先ず第一に、真の創造を信じるように呼び戻されなくてはなりません。それゆえ彼らがやむなくキリストを救い主として永遠に受け入れざるをえなくなる前に、真の創造者である創造主を信じるように呼び戻されなくてはなりません。彼らはキリストが実在しキリストにつく大群衆が天で待っていることを実感した後でさえ、彼らは獣とサタンがキリストを打ち破るのではないかとなお迷っています。こうして、天使は「創造主こそ創造者、創造主が裁かれる。創造主を恐れよ」と繰り返し大声で叫んでいるのです。

聖書に非常になじみ深い「天と地と海を造られた方」（出エジプト20：11）と云う包括的決まり文句を天使はくり返しています。複雑な宇宙が、原初の混沌からそれ自体進化する事は，たぶん、あり得ません。しかし、これはここ100年以上もの間、人々を魅惑し奴隷にしている実に馬鹿げた信念です。この時、天使は、創造された実体の慣習的目録に「水の源」を付け加えています。それは、十中八九大洪水の裁きのはじめが、「巨大なる大いなる水の源が、ことごとく張り裂けた」（創世記7：11）時であったためと考えられます。地殻の下深い所にあった高圧の水の貯水槽から噴出し導かれた素晴らしい泉は、地球の原初の水の循環の土台として役立つため創造主によって創造されていたのです。しかし、地球の原初の地圏・水圏・大気圏の複合体と共

に、このすべての体系は、大洪水の激変によって、まったく変えられてしまっていたのです。天使の叫び声は、創造主がこれらすべてのものを創造されたのに、その後、人の罪のためにかつてこれらを一度破壊されたことを思い出させたのです。したがって、創造主はなおすべてのものを支配しておられ、他に創造主の聖なる裁きが差し迫っている事に人々の注意を促しているのです。

創造の部分を福音で強調する他の理由は、聖書またはキリストに関する知識から除外され、文明から隔離させられていた人々に伝えるためです。このような人々は、創造主の実際の証拠と彼ら自身の良心で接し得る範囲内で、彼ら自身の経験によって到達するのが最善です。例えば、パウロは常に彼の同胞であるユダヤ人に話す時には常に聖書で始めました。ユダヤ人たちは既に聖書を知り信じており、彼らにイエスこそ聖書で約束している救い主であると納得させることだけ必要だったのです。しかしながら、パウロが異邦人に証する時、彼は、福音の最初に創造について述べました（使徒14：14-17、17：22-30）この接し方が、あれやこれやの理由で、中天を飛ぶ力ある天使の接し方でもありました。彼は、地に住む失われた大勢の人々に最後の緊急の呼びかけをしています。そして、彼らに彼らを創造された方に対する単純な信仰に立ちかえるように、そして、彼らを救うキリストにより頼むようにと迫ります。

黙示録14章8節　また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

六人の天使達の第二は、明らかに第一の天使が飛んだどこにでも続いて行きます。そして、第一の天使が

宣言した永遠の福音を支持する大切なメッセージを宣言します。再建されたバビロン・壮麗な首都に集約された獣の帝国の途方もない権勢と壮観は、感動的な信任状であり、地上に住むすべての人を怯えさせるのに大いに役立ち、彼らがキリストに立ちかえるのを思い留まらせます。

それ故第二の天使は、人々に大いなるバビロンとバビロンが表す全てに刑罰が宣告されたと人々に知らせるため大声で叫びます。現代のバビロンは、単に古代バビロンが生れ変わっただけで、その王国はニムロデによって大昔に始められた王国を引き継いでおり、バベルで始まった人間中心主義と超人的（即ち、サタン的）世界体系を永続させており、創造主に反逆する大宗教、商業、文化、と政治に人類を結び付けています。この言い表しようもないほどひどい霊的姦淫は、真の創造主の代わりに造られたものを拝みこれに仕えるもので、すべての彼女の霊的子供たち（世界中のすべての民族）が母なるバビロンから受け継いだ死に至る遺産です。

この節で用いられている語り方は絵画的でエレミヤ書51章7節から来ています。「バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。」それは黙示録17章2節でもう一度取り上げられ、そこではバビロンの主題はすべて悲しい枝分かれをもたらした。古代も将来も共にバビロンの影響は、長く続く、全世界的なもので、進化論的汎神論に基づく人間中心主義の体系は何世紀も通して数え切れない魂を永遠の罰に定めた。

しかし、ニムロデは死に、ネブカデネザルとベルシャザルそして獣自身も間もなく火の池の居住者となります（黙示録19：20）。「あなたは、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。・・・しいたげる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。金の都はどのようにして終わったのか。14：9下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき」（イザヤ14：4～9）。

このように天使は地の住人に警告し勇気づけます。おおいなるバビロンの崩壊は確かに来る、そして、それが既になったと考える時が直ぐに来ます。強調するため「バビロンは倒れた。倒れた」と二回メッセージは繰り返されています。バビロンの崩壊は黙示録18章に記るされている通りに、患難期の終りに実際に起こります。しかし、前もってこの宣言が第二の天使によってなされており、バビロンは間もなく崩壊することを地上に住む人々に何度も何度も請け合い宣言しているのです。

黙示録14章9節　また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、

それから、最初の二人の天使にすぐ続いて第三の天使が、獣に従う者の危険についてその危険は差し迫っていると地上に住む人々に警告します。天使の声は毎日毎日空中を横切ってすべての人に聞こえる十分な大きさです。したがって、警告されなかったと言える人は誰もいません。各々のメッセージは前のメッセージを補強し、強調します。第一の天使は「永遠の福音」と「切迫した裁きの警告」を宣告する。第二の天使は、人々に福音から人々を遮ろうとしている獣の力あるバビロン帝国は崩壊しようとしている、第三の天使は、個人的に狙いを定めて獣の命令に服している人々に対してより明白な警告を与えているのです。

彼らの背後にある世界の世俗的組織と宗教的組織のそれぞれの力にも拘らず、獣とその予言者は、獣に従うのを拒否しエルサレムの宮にある獣の像にひざまずかないすべての人を死刑にすると脅迫します。彼らはまた、すべての人は獣の刻印をその手か額に受けるように要求し、違反すれば死が要求された。この刻印が

なければ、売り買いも出来ないし、生きるのが非常に困難なので従うようにとの圧力が圧倒的になります。しかし、屈服させるために刑罰を課すと言う事は極めて悪いことです！「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。」と、また、「そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ10：28）とイエス・キリストは言いました。

黙示録14章10節　そのような者は、神［創造主］の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神［創造主］の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

獣の刻印を受けた人々に言い渡される宣告文は実に恐ろしい。国民がバビロンの偶像礼拝の怒りの葡萄酒を飲むように、今や彼らは創造主の怒りの葡萄酒を飲むのです。然し、長い年月恵みと憐みで軽減されて来た創造主の怒りは、今や、純粋で緩和されることなく、獣とその主である竜を選んだすべての人に完全に飲み干すように要求します。創造主の小羊として主イエス・キリストは、かつて父なる創造主の怒りの杯を飲み干しました。そして、怒っておられる創造主の激しい激怒のすべてを耐え、これらの激怒を受けるべき人々の代わりにご自身で苦悩を受けられました。それなのに、彼らは皆キリストの大いなる犠牲を今や頑固に拒絶したのです。したがって、彼らは彼ら自身で創造主の怒りの杯を飲まなくてはならアないのです。「主の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう。」（詩篇75：8）

そして、彼らが創造主の天にある祭壇で小羊の身代わりの苦しみを拒絶してしまったので、彼らは小羊と

聖なる天使たちの面前で、まさに彼らは彼ら自身で苦しまなくてはなりません。聖なる天使はたちは彼らが同じ様にはねつけたメッセージと奉仕を仲介していました。さらに、彼らの運命づけられた苦しみは、まさに現実に遭遇する厳しい拷問の一つでなくてはなりません。そして、その拷問は、「火と硫黄」の中での肉体上の苦しみです。これは明らかに火の池についての言及です。その中にサタンとその使いの天使達、獣と偽りの預言者たちとキリストを受け入れないで死んだすべての人々は投げ込まれます（マタイ25：41、黙示録20：10，14，15）。

硫黄の性質については黙示録9章17，18節での検討を見て下さい。この物質がなんであろうと、邪悪な者の究極的運命として、燃え続ける炎の環境が用意されいる事実に何の問題もありません。これは聖書で繰り返された主題です（ダニエル7：11、エゼキエル20：47，48、イザヤ66：24、マタイ3：12，13：50、マルコ9：43～49、ユダ書7節）。それを無視したり、霊的に取るのは馬鹿げたことです。救われずに死んだ人の身体は、甦らなくてはなりません（黙示録20：5，12～15、ヨハネ5：29など）。そして、このように物質の炎の中で苦しみ続けられるためにはからだを持たなくてはなりません。彼らが私たちの現在の身体がそうであるように燃え尽きるのかまたは燃えにくい身体に変えられるのかは聖書で明らかに示されてはいません。とにかく、救われない人々の霊と堕落した天使達に妥協した悪い霊は、永遠の火と拷問の場所に閉じ込められるのです。

この監禁は、ある意味で小羊と聖なる天使達の面前にあり、そして贖われた人々によってさえ眺める事のできるような位置にある（イザヤ66：23，24）けれども、これらの失われた霊たちは、宇宙のある遠い離れた地域に移されます。「そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅び（即ち、絶滅ではなく荒廃です）の刑罰を受けるのです。」（Ⅱテサロニケ1：9）。そこは「自分の恥のあわをわき立たせ

る海の荒波、さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されて。」（ユダ13）いるのです。このような外の暗やみに投げ出されるのです。黙示録19章20節の検討を見て下さい

黙示録14章11節　そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、ただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

永遠の刑罰という教義は、近代の知識人や創造主を否定する狂信者たちに取って異論のある所かも知れませんが、この拒否は、聖書が永遠の刑罰を明らかに教えているという事実を打ち消すことはできません。たとえ地獄の火が文字通りの火でないとしても、彼らの苦しみは、彼らがどんなん人であろうと永遠に続きます。これは空中を飛びかけながら天使が布告している明白な宣言です。

よし地獄の火は物質でない、又は、復活の身体が肉体でないとしても、少なくとも苦しみは本物で永遠に続きます。他に本当の永遠の刑罰の意味を伝える方法がないから、物質の燃える状況で伝えているのかも知れません。もしそうなら、実体は、少なくともその象徴的表現と同じようにひどいに違いありません。

その苦痛は、睡眠や一時的休憩の見込みもなく火と燃える煙だけでなくて永遠の疲労です。天における非常に喜ばしい約束は、休息の約束です。「したがって、安息日の休みは、神［創造主］の民のためにまだ残っているのです。」（ヘブル4：9）。事実、「彼らの労苦からの休息」は、まさに主に在って死んだ人々に次の節で約束されていて、これは疲れた旅人に取って確かに貴重な約束です。然し、（特に罪の意識と罪の結果から）の真の休憩は、キリストにだけ見出される（マタイ11：28）ので、キリストに留まっている人々以外には真の

休息はあり得ません。

この節の文章は、患難期後半の獣礼拝者に関わるもので、天使は、辛辣に、刻印を受けたすべての人に永遠の刑罰が待っている事を彼らにもう一度思い出させようとしています。この明白な指示は、実際に獣の刻印を受けた人々だけが地獄における永遠の苦しみに定められている事をどの点ででも示唆しています。事実、すべての人（不信者）が同じ火の池に入れられる（黙示録21：8）この刑罰は、永遠である事を聖書は明白に教えています。例えば、獣と偽りの預言者は彼らが最初に火の池に入った後一千年火の燃える池で苦しみ続ける様子が見られます（黙示録19：20、20：2，7，10）。この患難期の人々と同じ状態に置かれたなら、いつの時代の不信者でも獣の刻印を受けた人々にあらゆる面から喜んで同調し、獣を礼拝するはずです。創造主は正しく全知であり、その処罰はすべての人に用意されています。

他の一つの点も注目に値します。物質とエネルギー保存の原理は最も確かで科学の普遍的原理であることを近代科学は実例を挙げて証明しています。物質とエネルギーは形を変えることはできますが、創造したり消滅させることはできません。そして、もし自然界の物質が消滅されることがあり得ないとすれば、それよりはるかに重要な実体である人の霊と魂の混合体（特に人が創造された創造主のかたち・・・創世記1：27）は、霊魂絶滅論者が主張しているように、確かに絶滅する事や、あるいは、信者が条件付きの不死状態に置かれることなどあり得ないのです。妊娠したすべての人は、創造主のかたちにかたどって創造された人であり、霊と魂を持っており、どこかで永遠に生き続けるのです。

黙示録14章12節　神［創造主］の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はこ

こにある。」

この節は明らかにヨハネが不意に発した心の叫びです。そして、天にいる聖徒たちが心配している事柄に対して下される地に住む人々への裁きの恐ろしい宣言を和らげるためです。それは彼らがそのために待ち望み、苦痛を経験したものであり、遂に、それをもって彼らの忍耐が報われるものです。

初期のクリスチャンたちは、創造主が最後には彼らの忠実さに報い、彼らの迫害者を裁かれると信じて、忍耐と長い苦しみに耐えるよう熱心に勧めてきました（マタイ5：10－12、ロマ12：19、Ⅱテサロニケ1：6～8、ヘブル10：30～37、Ⅰペテロ1：6、7）。この忍耐と苦しみに対する実に明白な約束は、患難期に殉教した人に対しても言わされているのです（黙示録6：9～11）。

ヨハネが言っている「ここに」は、すべての聖徒の長年もにわたる忍耐の目標です。福音の約束は成し遂げられ、裁きは来ており、人間中心の世界体系は倒れ、創造主を敬わないものすべては地獄にいます。―これはすぐに起こる見込みで、彼らの忍耐は遂に正当化されるのです。

「ここに」はさらに信心深いすべての人が対象です。すべての邪悪な者の究極的死の後、正しいものは父の御国で輝き出るのです（マタイ13：43）。「創造主の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たち」という二重の賛辞に注意して下さい。悲しい事に、古代にも近代にも多くの道徳律超越論者の教師たちがいて、彼らはこれら二つを相反するものにしていますが、この場合、彼らは、横に並べるべきなのです。真に主イエスにあって救われる信仰をもつ人々は、キリストの命令を愛します（Ⅰヨハネ5：3－5）。創造主の命令（勿論、救いの手段としてではなく、私たちに生じることを求めているキリストの変わることのない清さの現れとし

ての）を拒否する人々は、主イエス・キリストに関わる真の信仰の表層的概念を持っているだけです（Ⅰペテロ1：14～16）。もし人が心からイエス・キリストを信じるならば、キリストの命令を守ります（ヨハネ14：21）。もし人が本当に創造主の命令を愛するならば、キリストを信じているのです（ヨハネ6：28、29）。いわば、これらは、硬貨の裏と表のようなものです。信仰の無い行為と行動の無い信仰は共に死んでいるのです。生きている信仰は従う信仰で、辛抱強い信仰であり、最後に、満足と報酬が定められています。

黙示録14章13節　また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」

最初の三人の天使達と終わりの三人の天使達との間には、ここ14章で重要な間隙があります。聖霊が語り、人の子が行います。

有史以来忠実な聖徒たちに対する創造主の約束すべての成就が差し迫っていることに注意を促していますが、患難期の後半の殉教者に対する特別な約束もあるのです。なぜなら、このような激しくかつ全地にわたる迫害の時期は、決してなかったからです。これは黙示録の七つの至福（その他は黙示録1：3、16：15、19：9、20：6、22：7、22：14）の第二で、「これから後」（すなわち、獣が人間中心の世界統治と抑圧の全世界的計画を実施した患難期の真ん中以降）主に在って死ぬ者に対する祝福を約束しているのです。

その約束は、天からの声でヨハネに伝えられるほど非常に大切な約束です。それを書き記すようにヨハネ

は命じられています。事実、黙示録で12回特に「書き記せ」（七つの教会への手紙に対する7回の命令に加えて、黙示録1：11、19、14：13、19：9、21：5）とヨハネは命じられています。不完全な記憶とか長い慣習によって書かれたのではありません。各々の声は聖書のこの最後の書に直ちに記されました。

祝福を最初に宣告した天からの声は同定出来ませんが、いまや、聖霊そのものからの鳴り響く応答です。七つの教会へのメッセージを除いて、黙示録にある聖霊が直接語ったただ二つの場合の最初で、第二は聖書の実に最後の招き（黙示録22：17）です。

この場合の聖霊のメッセージは、実に驚くべき約束です。天からの声として、特に患難期の殉教者に当てはまるけれども、その原則は確かに主に在って死んだすべての人に当てはめることができるのです。

死または携挙かでこの世のいのちが終わると、私達の労苦は終わりますが、私達の永遠の奉仕そのものが始まります（黙示録22：3）。私たちは「わたしたちの労苦は主に在って無駄ではない」（Ⅰコリント15：58）ことを知っています。何故なら私達の地上での労苦は私達の御国での奉仕の土台だからです（マタイ25：21）。同じ理由で、この地上での安楽と、この世を愛する人々の地上の労苦は無駄になります（Ⅰコリント3：14，15）。

聖書にある最も祝された約束は、「主に在って」為した私たちの良い業が、肉体にあるうちに実を結び、なお私たちが死んだ後にさえ私達の「記録された業」として認められるのです。「3：8 植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。」（Ⅰコリント3：8）

人の報酬はその人の労苦に対してで、その労苦から得られる実によるのではありません。その労苦は彼自身が主の下に去って長い年月が経って実現すると言ってもよいでしょう。「彼らの業は彼について行くのです」。患難期の殉教者は、各々忘れがたい証を彼らの殉教の死を見ていたすべての人に残します。なお、人類

歴史の携挙前の時代にいる私たち自身に関する限り、労苦と種蒔きを忠実に行う事に対する最も挑戦的動機の一つは、これら終りの日における私たち自身の使命の幾つかが携挙後にさえ実を結ぶかもしれないと言う可能性にあります。なされた証、配布されたとトラクトや書籍、書かれた手紙や記事が、創造主の恵みによってこれら患難期の聖徒の幾人かを勝ち取る助けに用いられるかも知れません。主が私たちを忠実なものとして下さいますように。

怒りの葡萄の実

聖霊は、彼らの信仰の故にいのちさえ捧げた信者の祝福に関して語っています。今や裁きのメッセージを齎すためこの章に書かれている三人の天使から成る第二のグループの出番です。遠近画法で、なお患難期の中間にあるのに、終わりに来るクライマックスを望み見ています。先のグループの三人の天使たちは、地に来る差し迫った裁きについて警告していました。後の三人は裁きの実行について語ります。そして、ハルマゲドンにおける大いなる創造主の日の来るべき戦いを命じ、その準備をします。

黙示録14章14節　また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。

静寂が三人から成る二組の天使の間にあるが、そのすぐ後に聖霊の慰めのメッセージがあり、ヨハネは驚

くべき光景を見ます。黙示録1章13節で最初に見た同じ人の子が再び現れます。これら二組の天使が現れる合間に、主イエスは、小羊として、騎手として、力強い天使として、その他さまざまな異なる御姿で現れました。然し、今ヨハネはイエス・キリストを栄化された人の子として、あるがままの永遠なる方として再び見ています。諸国の民が輝かしい栄光を帯びて来て（マタイ24：30）、力を持って治める（マタイ26：64）ために来る方を見るのは人の子としてです。彼らは「天の雲に乗って来る」方を見、そして、ヨハネも栄光の雲に包まれた人の子をここで見るのです。

その手にある鎌は勿論、キリストが裁きを行うために来つつあることを、そして、彼の頭にある冠は治めるために来ることを示しています。ヨハネはずっと以前、キリストについて、天の父が『裁きを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです』と言うのを聞いていました（マタイ5：27）。人の子として、完全な人として、甦った人として、また、キリストは、創造主の人に対するすべての約束の相続者であり、地を果て果てまで支配する方です（詩篇2：7，8、8：4～6）。

その光景は明らかに裁きの準備の一つであり、穀物刈り取り用のかまはヨエル3章13節からとられています。「かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。」ヨエルの本文にはまた来ようとしているハルマゲドンのとてつもない戦いについて預言していて、（ヨエル3：9～16）「主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。」時、そのクライマックスに達します。

黙示録14章15節　すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」

いまや、この章における裁きを前もって見せる最後の三人の天使たちが、次々と急ぎ現れます。最初の天使は神殿の控えの間から雲に乗った人の子に向かって叫びながら出てきます。これが天の神殿か地上の神殿かは述べられていませんが、恐らく地上の神殿からでしょう。その天使は恐らく獣とその像による神殿の忌まわしい冒涜を観察してきて、それで、天に向かって、これ以上延期しないように願って叫んでいます。邪悪な者の刈入れは既に脱穀の用意が出来ています。地上にある怒りの葡萄は満ちており、刈り取りの用意が整っています。

勿論、創造された天使は人の子に裁きを続けるように命令することはできないので、天使の叫びは、要求としてよりむしろ懇願と見做されるべきです。殉教した聖徒たちと同様に、聖なる天使は、人と悪霊の邪悪さとに身震いさせられ、やがて来る大いなる反逆が永遠に鎮められる時を恋い慕っています。そして、創造主のみこころは御自身が造られたすべての被造物になされるはずです。

黙示録14：16節　そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

聖なる所に立っている荒らす憎むべき者によって汚された聖なる神殿を守護している天使の願いに応えて、人の子は力強い刈入れを始められます。両者ともに大きなかまが用いられているけれども、「地を刈り取る」とのことばは、明らかに「地のぶどうを刈り集める」（19節）とは違います。一つはもう一つに先行します。

後者は、明らかにハルマゲドンに獣とその追従者の軍隊を集めることに対する言及です。最初の刈り取りは、明らかに穀物の収穫です。そして第二の刈り取りは、ぶどうを「葡萄酒」にする事です。最初は刈り脱穀するが、後者は、ぶどう搾り器に集めます。恐らく、前者は、患難期の後半の全世界的裁きすべてに対する言及で、怒りの七つの鉢が地にぶちまけられる時解き放される裁きで、首都バビロンとバビロンに繋がる全世界的機構の完全崩壊によってクライマックスに達します。後者は、ハルマゲドンにおける獣とその追従者たちの最終的裁きに対するより明確な言及です。

バビロンでの地を刈り取るクライマックスは黙示録１７，１８章に記されていますが、大昔エレミヤも預言し、古代バビロンの打倒は、事が起こる前に暗示されていました。「イスラエルの創造主・神、万軍の主が、こう仰せられたからだ。「バビロンの娘は、踏まれるときの打ち場のようだ。もうしばらくで、刈り入れの時が来る。」（エレミヤ５１～３３）と。バビロンの刈入れは小麦ともみがらとに分けます。この終わりの日時に於いてさえバビロンの社会に幾人か創造主の民がおり、最後の裁きは彼らを外します。「ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」（マタイ１３：４０～４２）。旧約聖書と新約聖書のバビロン崩壊に関する預言は共に、創造主の民でなおバビロンが慰められるようにと執着している者たちに対し、壊滅状態に陥る前にバビロンから逃れるようにとの勧告があります（エレミヤ５１：４５、黙示録１８：４）。

黙示録１４章１７節　また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。

人の子は、どうあっても失われた者を救おうと自身で求め続けておられるので、地の刈入れを企てられたのです。たとえ僅か2，3本の小麦の穀粒を毒麦で窒息しそうな畑で見つける事が出来ても、人の子は、裁きの最中でもなお「わたしの民よ毒麦の中から出てきなさい」と叫びます。そして、幾人かは応答し、大患難から出てきます。そして、小羊の血で彼らの衣を洗って白くしています。そして、獣の商標（焼印）を拒否し、主がそうされるのなら、殉教の死でさえ喜んで従います。

けれども、人の子は他の天使に、「地のブドウの木」を刈り取る仕事を割り当てます。そして、創造主の怒りの巨大なぶどう搾り器でブドウ酒を踏みつけているなかにこれらぶどうの木すべてを投げ込みます。このように、この天使は、地上の神殿にいる先の天使と対照的に、天にある神殿から大声で叫んでいます。彼は、天にある創造主の御前にある神殿にいたのですから、これは、たぶん「創造主の御前に立つ天使達」の一人です。さらに、彼には人の子自身の使命に実に近い使命が割り当てられ、おおいなる裁きのかまを使います。刈入れの祝福を刈り取るのではなく滅びを取り除く事について語っている裁きのかまは、その鮮明な記述でそのことを指し示しています。ぶどう搾り器に相応しく熟したブドウの房で、その鋭い歯から逃れるものは何もありません。

黙示録１４章１８節　すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどう

はすでに熟しているのだから。」

黙示録14章の第六の天使が最後に現れます。そして、この天使は、第四の天使のように地上にいて、明らかにエルサレムにある神殿の祭壇に仕える役割が当てがわれています。聖書は、あちこちに創造主につく色々な天使達の特別な任務と力について述べ、みなどうにかして救いの相続者となる人々に何らかの方法で仕える天使としての興味ある面を垣間見させています（ヘブル1：14）。例えば、黙示録のここに、私たちは風を引き留めることの出来る天使に出合います（黙示録7：1）。この天使は恐らく、エリヤの時代に祭壇に天からの火を呼び寄せたり差し止めたりして「火を操る力」を持っています（1列王18：17～41）。

第四の天使が人の子にかまを入れて、地の収穫を刈り取るように懇願したので、今や第六の天使が人の子が第五の天使を送り、かまを入れて地の葡萄酒を集めるように熱心に願い求めます。邪悪さと反逆のブドウはぶどうの木で十分に熟しており、今や創造主の怒りの大いなるぶどう搾り器に直接入れるのに適した状態になっています。

「地のブドウの木」は「天のブドウの木」とは正反対で全く違います。イエスは「わたしは真のブドウの木」（ヨハネ15：1）と言いました。この真のブドウの木の枝（イエスは「あなたがたは枝である」と言いました）から出て枝についている実は良い実です（ヨハネ15：16）。けれども「地のブドウの木」の実は、すっぱい実で苦い葡萄酒を産出し、まさに聖なる圧搾器で踏みつけられようとしています。「偽りの葡萄の木」は、明らかに「密告者」のしるしがついていて、よってそれに加わる枝をすべて持つ、竜の権力下にある獣と偽りの預言者によって建て上げられた反キリストの大きなにせの組織に言及できるだけです。これは創造主に対する広大無辺の反逆の最後

のかたちで、これは最後に永遠に押しつぶされなくてはなりません。

小羊の血がかつて敵によって流されたように、彼らの血が今や流されなくてはなりません。そして最後の一滴まで絞り出されます。小羊の血が流された時、御国での命を与える新しいブドウ酒になりました。あたかも主の晩餐での記念の杯で象徴されるように彼らの血が流された時、ハルマゲドンでの巨大な酒ぶねで粉々に砕かれた空の鳥にとっての「偉大な創造主の晩餐」（黙示録19：17）を供給するに過ぎないのです。

黙示録14章19節　そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。

地上のブドウの木を切るためかまを入れると言うのは明らかに、彼らの故国から獣の追従者すべての急速な転地を物語っています。彼らは一つの場所に集められるはずです。これは聖書の他の多くのところでも述べられている大集合です。「わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、」（ヨエル3：2）。「わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。」（ゼカリヤ14：2）。「こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。」（黙示録16：16）「また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。」（黙示録19：19）。

彼らが投げ込まれるはずのぶどう搾り器は、キリストと反キリストの最後の闘争の場所になるはずと随分前から定められていたところです。途方もなく大勢の兵隊がこの最後の対決のためイスラエルの地に集められます。ヨエルはそれを「さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。」（ヨエル4：

14）と記しています。

一度集められ、ぶどう搾り器に投げ込まれると、これら有罪と判定された群衆は「10：27ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはない」（ヘブル10：27）という事実に直面します。それは「創造主の怒りのぶどう搾り器」で、怒りを実行するのはキリストご自身です。なぜなら、キリストは「創造主の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる」（黙示録19：15）方だからです。

黙示録14章20節　その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。

ヨハネが患難期の終りに向けての光景を前もって見て、選民の地（イスラエル）に磁石のように引き寄せられるすべての国民をヨハネが見るにつけ、彼は間もなくそれらの人々に覆いかぶさる災難のはなはだしさを感じるに違いありません。しかし、彼は最終的に彼の予言的幻を明らかにする恐ろしい光景をほとんど予見できないはずです。

イスラエルの全地に展開している大勢の密集軍として一緒に集まった無数の群衆すべての血が突然流されるのは、ヨハネに示された恐ろしい光景そのものに過ぎません。流血は非常に大量でしかも非常に迅速なので、唯一の適切な表現は、葡萄搾り器のなかにあるブドウをドシンドシンと踏みつける人の脚の下にある、熟した果物の途方もなく大きい集まりから噴出する（ほとばしる）果汁とでも言うべきです。兵隊と市民たちの大群衆、多くの騎馬、疑いなく多くのものは徒歩で、その他の人々は色々な乗り物に、大きな飼い葉おけの中に

一緒に群がっているかのようで、逃れることはできない、彼らの目は天にある驚くべき光景に釘づけにされた。突然、ほとばしり出るぶどう汁のように爆発し、血が十億もの噴水から注ぎ出されます。

彼らの身体は、瞬く間に彼ら自身の血で浸され、じきに空を暗くして待っているハゲワシの群れのための死肉になります（黙示録19：17，18）。こうして、獣を礼拝しその刻印を受けている人々の言い表しようもないほどひどい終わりが来ます。

この血の大おけは1600ファーロング、又は、おおよそ180マイル（288km）の範囲に及びます。出来るなら、想像してみて下さい。2億人から成る堂々とした軍隊が、長さ180マイル（288km）で幅1マイル（1.6km）に展開していた。これは、事を処理するのに各人一人当たり平均してわずか25平方フィート（7.62㎡）に当たります。すなわち、前と後ろと両側の人との各自の距離はわずか7.6メートルになります。もし彼らが馬の背に乗っているとしたら、彼らはすし詰めになるでしょう。

二億が不可能な数でないことは、第六の天使のラッパの下ユーフラテス川から解き放たれた悪霊に憑かれた騎手の数（黙示録9：16）が二億である事実と、この時点で恐らく二十億以上の人々が地上にいる事実から明らかです。五体満足な多くの人々（女も恐らく含めて）が獣の配下にある諸国の軍隊に召集されるでしょう。もし、世界人口の10％が聖なる土地における獣の下での戦いに集められるなら、（そして、このような事はこの莫大な軍隊を記すために聖書に用いられた無比の内容に照らして相応しいとの思われる。）二億になるでしょう。そして、このような数は、幅約2キロ、長さ約300キロにわたる正真正銘山なす人です。

そして、血が突然これら大勢の身体からほとばしり出る時、彼らが乗っている馬の血に加え、人の海が血の海になります。血は谷の中央に向かって流れ、そこでは、文字通り馬の轡に達します。

このすべては、「都の外」で起こります。したがって聖なる都自体はこの大虐殺で汚染されません。軍隊はエルサレムを包囲し、ある程度まで略奪するでしょう（ゼカリヤ12：2，3、14：1～3）。しかし、エルサレムを占領することはできないで、彼らの戦線はユダヤの荒野、ヨルダン川と死海の沿岸まで退却し、古代のイドゥミヤ（エドムのギリシャ名）即ち、エドムにまで達します。

密集方陣（槍と盾を持った歩兵が前後左右の間隔を詰めて突撃する戦闘隊形）が、エドム深くに突き出し、実際にボズラにある古代エドム人の要塞は死海の南先端から南東におおよそ20マイル（36キロ）の所にあります。北の方にエスドラエロン平野（イスラエル北部カルメル山付近の地中海沿岸からヨルダン川に至る平野・古戦場として有名（また、エズレエルの平野）cf メギド）またはエズレエルの谷、メギドの町の近く、昔からハルマゲドンの予言的名で知られる地方、メギド山へのびています。密集方陣の中心はエルサレムの反対にあるユダヤの荒野に集合しています。その地はかつてヨシャパテ王が創造主の民の敵に大勝利を収めたところ（Ⅱ歴代誌20：20～24）で、したがって。聖書でその後「ヨシャパテの谷」と呼ばれています。

ボズラからヨシャパテの谷を通ってハルマゲドンに至る線は、大雑把に長さ140マイルです。エルサレムがその線のぴったり真ん中に当たります。この節で180マイルと言われているのは、獣の軍隊がボズラとハルマゲドンを超えて20マイル位突き出るのを許すことでしょう。野営地の幅が1マイルの代わりに1・3マイルであるならば、前述のように一人に5フィート仮定すると、その終わりはボズラとハルマゲドンに当たるはずです。どんなに精密な数と地域であろうと、少なくとも聖書の記載は飛びぬけて信じるに足る事であり、全くその通りに取るべきものです。

この大きな峡谷の真ん中で、血は馬の轡に達します。「主の剣は血で満ち、・・・主がボツラでいけにえを

ほふり、エドムの地で大虐殺をされるからだ。」（イザヤ34：6）「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたしだ。」「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。」（イザヤ63：1～4）

このように、ぶどう搾り器は、南にあるエドムのボズラから広がり、北の方ハルマゲドンに達します（黙示録16：14～16）。「その方は血に染まった衣を着ていて、・・・万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。」（黙示録19：13～15）。その中心はヨシャパテの谷一点に集まります。「諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。」（ヨエル3：12，13）

聖地にこのように前例のない地上の軍隊が集合するのは、一体どのような時か。なぜこのような大群が、イスラエル軍のかわいそうな残された軍隊に敵対して集まるのでしょうか。

獣がエルサレムと神殿を支配した時、多くのイスラエル人は荒野に逃げてしまっており（黙示録11：2、12：6）、残りの者は、その大多数を滅ぼす迫害の対象になっていた。それなのに、エルサレムを取り囲む獣の巨大の軍隊を此処にもう一度見るのです（ゼカリヤ12：1～3）。

患難期の中ごろに獣の像が聖なるところに立ってから、重大な何事かがエルサレムに起こっているのは明らかです。何か不思議な方法で、獣の代行者が挫折させられ、イスラエル人が再びエルサレムを支配し、そして（おそらく、新しい首都バビロンで寛いでいた）獣が激怒しているのです。

このすばらしい出来事が正確に成就するのは、まさに患難期の終りですが、たとえ彼の当面の遠近画法が患難期の中点に絞られるとしても、ヨハネは彼の預言的幻でそれを前もって見ることを許されているのです。聖書はこれがどのようにしてすべて成就するかを説明していませんが、この章の初めにシオンの山にいた十四万四千人のイスラエル人の幻は、彼らがエルサレムへ帰還するのと何らかの関わりがあることを暗に示しています。

これは提案に過ぎませんが、恐らく十四万四千人は、ほぼ3年半にわたり荒野にいる人々を教えた後、彼らを救い主の来臨について彼らを整えて、彼らはキリストが来られる時そこでキリストに会うためエルサレムに帰ります。彼らは創造主の無敵の保護を肉体に受けているので（黙示録7：3、9：4、14：1）、獣の軍隊は彼らがエルサレムを占領し、シオン山に陣営を立てるのを妨げる事は出来ないはずです。シオンの山こそ小羊が彼らに会うために速やかに来るところです（黙示録14：1）。

帰って来る救い主との最後の対決が差し迫っている事を知って、確かに彼の主人であるサタンに活気づけられ導かれて、獣は絶望的になって招集できるすべての軍勢を地上のすべての王たちから集めます。そして、獣はそれによってエルサレムを奪還し彼らがキリストと共に帰って来る時、天の軍勢を打ち負かせるとのはかない希望をさえ持つのです。

勿論、撃退された敵のこの絶体絶命の発作的活動は、全く無駄です。それは地上にかつて集められた最も

強力な軍隊を構成するにも拘らず、それは、実際には、創造主のぶどう搾り器に大量の流血を齎すため、地上のブドウの熟した果実を集めるだけです。

天で洗われた剣が、「主は御怒りの日に、王たちを打ち砕かれる。主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治めるかしらを打ち砕かれる。」（詩篇110：5）。悪者の血を流す剣ははがね（鋼鉄）ではないでしょう。なぜなら「この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。」（黙示録19：15）とあるからです。「主はシオンから叫び」（アモス1：2）「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。」（イザヤ11：4）。「その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」（Ⅱテサロニケ2：8）。小羊が最後に裁きを宣言される時には、主の力強いことばは「両刃の剣よりも鋭」（ヘブル4：12）いのです。